

ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2004年9月～10月）

気 象 庁

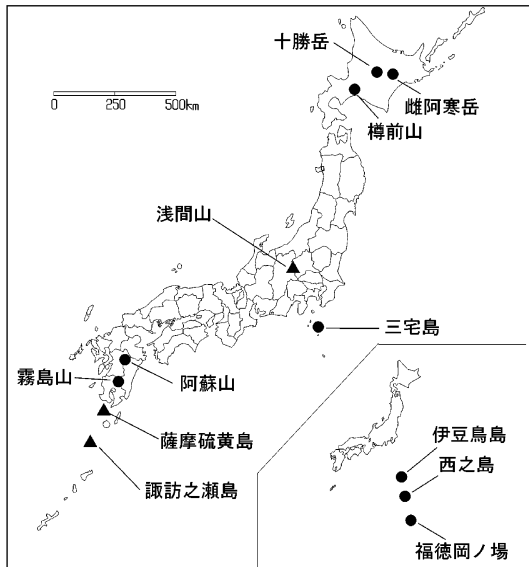


図 1. 2004年9月～10月に目立った活動があった火山

▲: 噴火した火山

●: 活動が活発な状態にあるか、もしくは観測データ等に变化があった火山

●雌阿寒岳（43°23′03″N, 144°00′46″E）

10月1日に実施した調査観測では、赤外放射温度計¹⁾による観測でポンマチネシリ96-1火口の最高温度は約340℃と高温であった（測定距離50m, 前回（6月6日実施）は約350℃）。

噴煙の状況、地震の発生状況及び地殻変動の状況等に特に変化はなかった。

¹⁾ 赤外放射温度計及び赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度を測定する測器であり、一方、熱伝対温度計はセンサーを直接熱源に当てて温度を測定する測器である。前者は熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、大気その他の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

●十勝岳（43°24′56″N, 142°41′25″E）

62-2火口では活発な噴煙活動が続き、遠望カメラによ

る観測では、噴煙は白色で高さは概ね火口縁上200mで推移した。

9月12日に実施した調査観測によると、62-2火口内には透明な火山ガスを強い勢いで噴出する非常に活発な噴気孔が引き続き確認され、赤外熱映像装置¹⁾の観測（測定距離160m）による最高温度は約200℃と高温であった（前回（8月6日実施）は約180℃）。その他、62-2火口周辺の地熱域、大正火口及び旧噴火口の状況に変化はなかった。

地震の発生状況、地殻変動の状況等に特に変化はなかった。

●樽前山（42°41′17″N, 141°22′49″E）

10月1日、14日及び25日に実施した調査観測では、赤外放射温度計¹⁾による観測でA火口の最高温度は約600～620℃（前回（5月26日実施）は約620℃）、10月1日及び15日に実施した調査観測では、熱伝対温度計¹⁾による観測でB噴気孔群の最高温度は両日とも約430℃（前回（5月26日実施）は約410℃）と高温であった。

噴煙の状況、地震の発生状況及び地殻変動の状況等に特に変化はなかった。

▲浅間山（36°24′12″N, 138°31′34″E）

9月1日、23日及び29日に中爆発が発生し、9月16～17日には連続的に小規模な噴火が発生した。9月1日の噴火に伴い火山活動度レベルを2から3に変更した。

9月1日20時02分に中規模の爆発的な噴火（中爆発）が発生した。噴火に伴い、軽井沢測候所（山頂火口の南約8km）で大きな爆発音と205 Pa²⁾の空振が観測され、測候所に設置された監視カメラで噴石が山腹まで飛散するのが観測された。悪天のため噴煙の状況は不明であった。9月2日に行った現地調査によると、山頂火口から北東方向に火山灰、火山礫が降下していた。降灰の範囲は福島県北部太平洋沿岸まで及んだ。噴火に伴い火山活動度レベルを2（やや活発な火山活動）から3（山頂火口で小～中規模噴火が発生）に変更した。浅間山が噴火したのは昨年4月18日以来、山腹以遠に噴石を飛ばすような規模の噴火については1983年4月8日以来であった。

9月15日11時53分以降小噴火が頻発するようになり、9月16日未明から17日夕方まではほぼ連続的に小噴火が発生した。その後も小噴火が頻発する状態が9月18日21時頃まで続いた（図2）。噴煙の高さは火口縁上

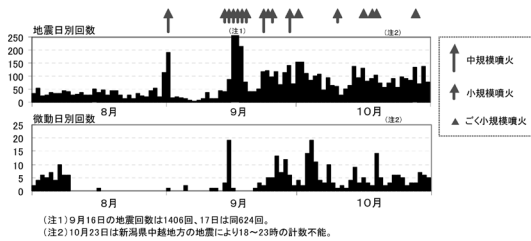


図 2. 浅間山 2004年8月～10月の噴火、地震及び微動の日別発生状況

1,000～1,500 m で推移し、軽井沢測候所では断続的に弱い爆発音と空振(最大 9 Pa^2)を観測、爆発地震も観測された。この一連の噴火による火山灰は北西の風により南東方向に流され、東京を含む関東地方南部の広い範囲で降灰が確認された。東京(千代田区大手町)で降灰が観測されたのは1982年4月26日の浅間山の噴火以来であった。

9月23日19時44分の中爆発が発生、軽井沢測候所で爆発音と体感空振を観測した(空振計では 72 Pa^2)。噴煙等の状況は悪天のため不明であった。爆発に伴い軽井沢町追分及び御代田町御代田で震度1を観測した。降灰の範囲は山形県まで及んだ。

9月29日12時17分の中爆発が発生した。噴煙等の状況は悪天のため不明であった。爆発に伴い軽井沢測候所で弱い爆発音と空振(30 Pa^2)を観測し、御代田町御代田で震度1を観測した。降灰は山頂の北側で確認され、火口から4 km 付近で最大直径4 cm 程度の火山礫が確認された³⁾。

10月10日23時10分に小規模な噴火が発生した。噴煙の状況は悪天のため不明であった。この噴火に伴い軽井沢測候所に設置した空振計で 19 Pa^2 の空振を観測した。噴石の飛散状況は雲のため不明であったが、風下側の火口の北北東4 km 付近で最大2 cm 程度の火山礫が確認されたほか、北北東方向の群馬県嬬恋村及び長野原町で降灰があった³⁾。また、10月1日(2回)、16日、18日(2回)、19日及び28日にごく小規模な噴火が発生した(図2)。

9月16日に国土地理院が実施した合成開口レーダーによる観測で、火口底北東側にドーム状の地形が確認され、火口底に溶岩が噴出したと推定された。9月18日に行った上空からの火口観測⁴⁾で、赤外線熱映像装置¹⁾による火口内の温度観測により、火口底の北東ないし北側に直径約100 m の高温部が確認されたが、これは上記の溶岩に対応すると考えられる。10月1日に行った上空からの火口観測⁴⁾によると、火口底の高さは9月1日の噴火

前よりもやや上昇し、山頂からの深さは約190 m であった(噴火前は約250 m)。また、火口底北東側に直径約70 m、深さ約40 m のくぼみが確認され、その中心部には赤熱部が見られた。これは上記溶岩の一部がその後の噴火で吹き飛ばされて形成されたものと考えられる。赤外線熱映像装置¹⁾による観測では火口底の最高温度は 517°C と高温であった。また、10月28日に行った上空からの火口観測⁴⁾によると、噴煙のため火口底全体の様子は確認できなかったが、火口底は中央に向かって低くなっており、全体的に10月1日の観測時より低くなっていると推定された。白色の噴気が火口底全体から活発に噴出しており、噴気孔の周りには硫黄昇華物とみられる黄色い付着物が確認された。赤外線熱映像装置¹⁾による観測では火口内の最高温度は 375°C で、10月1日(517°C)に比べ低下していた。

山頂火口からは、噴火時を除き、白色噴煙が連続的に噴出し、最高で火口縁上1,000 m まで上がった。

高感度カメラ⁵⁾で微弱な火映がしばしば観測され、軽井沢測候所から時々肉眼でも弱い火映が観測された(9月19日、21日、28日及び10月6～7日)。

地震活動は、微小な地震が8月31日(前期間)15時頃から9月1日20時02分の中爆発に至るまで多発し、8月31日の日回数は114回、9月1日は191回であった。その後一時少なくなったが、9月13日以降やや多くなり、小噴火がほぼ連続的に発生した9月16日未明から9月17日夕方にかけて噴火に伴う地震が多発し、日回数は9月16日が1,406回、9月17日が624回であった。その後、期間の終わりまで日回数26～212回と多い状態で推移した(図2)。

火山性微動は、9月1日20時02分の中爆発直後から噴火に伴い発生したとみられる微動が同日23時頃まで続いた。その後、9月上旬には一時発生回数が少なくなったが、9月中旬以降は9月15日及び10月4日に19回発生したのをはじめ、1日あたり数回～十数回とやや多い状態で推移した(図2)。

火山ガスの観測⁶⁾では、二酸化硫黄の放出量は日量約900～3,100トンで、2003年2月6日にごく小規模な噴火が発生した際に観測された放出量(日量約1,900～2,700トン)と同程度であった。

F点の傾斜計⁷⁾で、9月1日、23日及び29日の中爆発の前に山上がりの傾斜変化⁸⁾が観測され、9月1日及び23日の噴火では、直後に急激に山下がりの傾斜変化⁸⁾が観測された。また、9月16日未明～17日夕方にかけてほぼ連続的に小噴火が発生した際には、その期間中、ゆっくりと山下がりの傾斜変化が観測された。10月10日の小規模な噴火の前には特に顕著な傾斜変化は観測されな

かったが、10月28日のごく小規模な噴火発生の際には、噴火の約30分前からわずかな山上がりの傾斜変化⁸⁾がF点及びA点の傾斜計⁷⁾で観測された。なお、10月6日、F点の傾斜計⁷⁾で、9月23日の中爆発前にみられたのと同程度の山上がりの傾斜変化⁸⁾が観測されたが、噴火は発生しなかった。

山頂～軽井沢測候所間の距離を測定し山頂部の地形変化を観測している光波測距観測では、今年8月中旬から9月下旬まで山頂部が膨らむような傾向が継続し、以後停滞した。8月中旬から9月下旬の変化は火口浅部へのマグマ供給が継続していたことを示すものと推測される。

GPSによる地殻変動観測では特に顕著な変化はなかった。

- ²⁾ 空振はおおむね10 Pa (パスカル) を超えると身体に感じられるようになり、数百 Pa ではガラスが割れるなどの被害を生じる可能性がある。
- ³⁾ 9月29日の噴火の火山礫の状況は東京大学地震研究所の調査、10月10日の噴火の噴出物の状況は東京大学地震研究所及び地元防災関係機関の調査による。
- ⁴⁾ 長野県(9月18日及び10月28日)及び長野県警(10月1日)の協力により気象庁と東京大学地震研究所が共同で実施。
- ⁵⁾ 気象庁及び国土交通省関東地方整備局利根川水系砂防事務所が山麓に設置。
- ⁶⁾ 9月3日、7日、13日、10月1日及び28日に実施。9月7日の観測は陸上自衛隊の協力による。
- ⁷⁾ F点の傾斜計は山頂の北北東約2.5 km、A点の傾斜計は同南南東約3.8 kmに設置。A点の傾斜計は10月15日から観測開始。
- ⁸⁾ 山上がりの傾斜変化は山頂直下が膨らんだことを、山下がりの傾斜変化は山頂直下がしぼんだことを示すと考えられる。

●三宅島 (34°04'43"N, 139°31'46"E)

多量の二酸化硫黄の放出が続いた。

噴煙活動は引き続き活発で、白色噴煙が山頂火口から連続的に噴出した。期間中の噴煙の高さの最高は火口縁上1,000mであった(前期間の最高は火口縁上1,200m)。

上空からの観測⁹⁾では、噴煙活動に大きな変化は見られなかったが、山頂火口内の状況は噴煙のため不明であった。火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量は日量2,300～6,700トンで依然多い状態であった(図3)。赤外線映像装置¹⁾による観測では、火口内の最高温度は164℃で(10月14日の観測)依然として高い状態にあっ

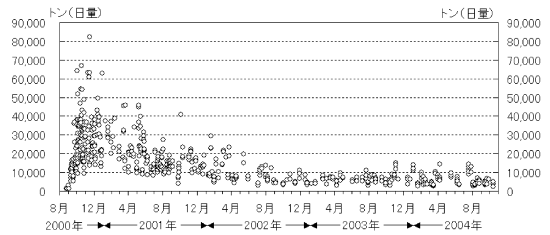


図 3. 三宅島 二酸化硫黄の放出量(日量に換算)(2000年8月～2004年10月)。

2002年秋以降は日量3千～1万トン程度でほぼ横ばいとなっている。

た(前回8月10日の観測では190℃)。また、全磁力の連続観測では特に変化は見られず、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えられる。

山頂直下では、振幅の小さいやや低周波地震の活動が2003年4月以降活発な状態で推移しており、今期間も月回数¹⁰⁾が9月431回、10月783回とやや多い状態であった(前期間は7月1,007回、8月639回)。

火山性連続微動の振幅は最近1年半以上大きな変化は見られていない。また、GPS観測によると、三宅島のゆっくりした収縮を示す地殻変動が続いている。

⁹⁾ 9月14日、21日、28日及び10月14日に警視庁、東京消防庁及び陸上自衛隊の協力により気象庁が実施。

●伊豆鳥島 (30°28'48"N, 140°18'22"E (硫黄山))

海上保安庁が10月12日に行った上空からの観測によると、島の北岸の兵庫浦から船見岬にかけての沖合約300mまでの海域に黄緑色の変色水が確認された。また、島の南岸の三ツ石から燕崎にかけての沖合約300mまでの海域に黄緑色の変色水が確認された。伊豆鳥島の周辺海域において変色水が確認されたのは昨年11月6日の海上保安庁の観測以来である。

●西之島 (27°16'27"N, 140°52'56"E)

海上保安庁が10月12日に行った上空からの観測によると、島の南西岸から西岸にかけての沖合約300mまでの海域に黄緑色の変色水が確認された。また、島の東側には半径約400mのごく薄い黄緑色の変色水が確認された。西之島の周辺海域ではたびたび変色水が確認されており、最近では今年3月22日の海上保安庁の観測により確認されている。

●福徳岡ノ場 (24°17.0'N, 141°29.1'E)

海上保安庁及び海上自衛隊が行った上空からの観測に

表 1 福徳岡ノ場 観測された変色水の状況

観測日	色	範囲	その他	観測機関
9月4日	乳白色	東南東方向に長さ約100m, 幅約20m		海上保安庁
9月21日	緑色	半径約1.8km		海上自衛隊
10月10日	薄い緑色	北東に幅約100m, 長さ約2,500m		海上自衛隊
10月12日	黄緑色	北北東に幅約300m, 長さ約2,000m		海上保安庁
10月13日	黄緑色	南東に幅約300m, 長さ約2,000m	変色水に沿って幅約50m, 長さ約500mの範囲に白色の浮遊物が筋状に点在	海上保安庁

よると、福徳岡ノ場の海域でたびたび変色水が確認された(表1)。なお、10月14日に海上保安庁が行った観測では変色水は確認されなかった。

●阿蘇山 (32°52'44"N, 131°05'58"E (中岳))

中岳第一火口では、2004年1月14日に規模の大きな土砂噴出が発生して以降、湯だまり¹⁰⁾内で小規模な土砂噴出が断続的に発生していたが、9月30日以降土砂噴出は観測されなくなり、湯だまり¹⁰⁾の中央、西及び南西側で弱い噴湯現象が観測されるようになった。湯だまりの状況は、期間初めの色が灰色で量が約3割から、台風等の大雨による影響で、9月9日には灰白色で約7割、9月24日には灰緑色で約8割と変化した。10月に入って、10月7日には色が乳緑色になり、10月12日には灰緑色で約5割、15日には灰白色で約4割と変化した。10月18日～21日の降水の影響で、10月21日には再び色が灰緑色で量が約8割になった。湯だまりの表面温度は61～74℃であった(前期間は65～82℃)。火口壁の最高温度は127～187℃で前期間(278～322℃)よりやや低下した。

噴煙の状況は、今期間を通じて白色で、噴煙高度の最高は火口縁上600mで通常と比べ変化はなかった。

5月13日から続いていた火山性連続微動は9月29日16時32分まで継続した。10月には、火山性連続微動が10月10日から11日にかけて発生し、継続時間の短い微動が31回発生した。孤立型微動の発生回数は、9月1,587回、10月2,164回であった(前期間は7月2,490回、8月2,675回)。また、10月にB型地震が増加し、10月の月回数は344回であった(9月は79回)。

その他、A型地震の発生は少なく、GPSによる地殻変動観測では火山活動に起因する変化は見られなかった。

¹⁰⁾湯だまり: 活動静穏期中の中岳第一火口内には、地下

水などを起源とする約50～60℃の緑色のお湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少がみられ、その過程で土砂を吹き上げる土砂噴出現象等が起こり始めることが知られている。

●霧島山 (31°55'51"N, 130°51'50"E (韓国岳))

御鉢火口内で2003年12月に確認された噴気孔からの噴気活動は、消長を繰り返しながらも依然としてやや活発で、監視カメラで火口縁上50～300mまで上がる噴気が時々観測された。9月9～13日に行った調査観測では、上記噴気孔から依然として勢よく噴気が出ているのが確認されたが、3月の観測時に比べるとやや弱まっていた。

9月に御鉢付近を震源とする地震の回数がやや増加し、月回数は36回であった(8月は6回、10月は16回)。新燃岳付近の地震活動は低調で、火山性微動は発生しなかった。

また、9月23～24日に韓国岳付近を震源とする地震がやや増加した。

▲薩摩硫黄島 (30°47'22"N, 130°18'27"E (硫黄岳))

9月25日09時37分頃に噴火を観測した。噴煙の高さの最高は火口縁上700m(灰白色)であった。鹿児島中央警察署硫黄島駐在所によると、9月25日09時30分頃に集落(硫黄岳の西南西約3km)で降灰があり、強い亜硫酸ガス臭があった。また、9月27日にも強い亜硫酸ガス臭があった。

10月1日に噴火があり、13時10分に監視カメラ(硫黄岳の西南西約3kmに設置)で降灰を観測した。噴煙の状況は悪天のため不明であった。また、鹿児島中央警察

署硫黄島駐在所によると、10月4日、5日及び25日に集落で降灰があった。

10月26日に連続的な火山性微動が発生し、10月26日及び28日には継続時間の短い火山性微動がやや多く発生した。

▲諏訪之瀬島 (29°38'05"N, 129°42'58"E (御岳))

爆発的噴火が10月23日に4回発生し、23日朝に集落(御岳の南南西約4km)で多量の降灰があった¹¹⁾。爆発的噴火が発生したのは今年7月5日以来である。

また、9月23日昼過ぎに火山灰混じりの噴煙が南東方向へ流れているのが確認され¹¹⁾、10月5日に少量の火山灰を含む噴煙が火口縁上700mの高さに上がっているのが確認された¹¹⁾。10月28日には監視カメラで灰白色の噴煙が高さ火口縁上400mまで上がって西に流れるのが観測された。10月23日以外は集落への降灰はなかった¹¹⁾。

火山性連続微動が、10月22～24日、26日及び28日に発生した。

10月13～18日に実施した調査観測および10月16日に海上保安庁の協力により実施した上空からの観測によると、今年2月に御岳火口内に新しく確認された火孔は火山灰や土砂で埋もれ、御岳火口内の旧来の火孔から上がる少量の噴煙と青白ガスが確認された。

¹¹⁾ 降灰及び9月23日、10月5日の噴煙の情報は十島村役場諏訪之瀬島出張所による。

(文責: 気象庁火山課 長谷川嘉彦)

○教員公募のお知らせ

【大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻】

1. 職種・人員: 宇宙地球科学専攻 助手・1名
2. 所属: 当専攻では、平成17年1月より中嶋悟教授が赴任予定です。このグループの助手を公募します。
3. 専門分野: 実験地球物理化学
今回公募対象の新研究グループでは、伝統的な地球惑星科学とは異なった学際理学的な視点から、岩石・水相互作用などを軸とした水と生命の地球物理化学に関する実験的研究を展開していきたいと考えています。これらの研究を積極的に推進するとともに、教育にも熱意のある方を希望します。
4. 着任時期: 平成17年4月1日予定
5. 応募資格: 博士の学位を有するか、平成16年度中に取得見込みの者
6. 提出書類
 - (1) 履歴書
 - (2) 研究業績リスト 原著論文、総説、報告書、著書

に区分

- (3) 主要論文の別刷もしくはコピー、3篇以内(研究業績リストに○印を付して下さい)
 - (4) これまでの研究歴(A4用紙1枚)
 - (5) 着任した場合の研究・教育に関する抱負(A4用紙1枚)
 - (6) 応募者について照会可能な方2名の氏名・所属と連絡先
7. 公募締切: 平成16年12月24日(金) 必着
 8. 書類送付先:
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-1
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻長
川村 光
 9. 問合せ先:
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
土山 明
電話: 06-6850-5800 ファックス: 06-6850-5480
e-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp
- ※ 封筒に「助手公募書類在中」と朱書きし、簡易書留か書留で送付のこと
提出書類の内、別刷以外はすべてA4用紙を使用すること
当専攻のホームページ:
<http://www.ess.sci.osaka-u.ac.jp/index-jp.html>

○教員公募

【京都大学防災研究所】

1. 公募人員: 助手1名
2. 所属: 地震予知研究センター(鳥取観測所担当: 宇治勤務)
3. 研究内容等: 地震予知や地震防災に関する研究を推進するために、地震発生機構、弾性波伝播に関する研究を行う。とくに三次元伝播、地殻構造トモグラフィ、地震発生の動的モデルなどの研究を理論及び数値解析手法に基づいて研究することが望まれる。
また、京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻の教育を担当する。
4. 任用時期: 平成17年4月1日
5. 応募資格: 着任時に博士の学位を有すること。国籍は問わないが、日常的に日本語が使えること。
6. 提出書類: 次の(1)～(6)各一式
 - (1) 履歴書
 - (2) 研究業績一覧(Peer Reviewed Paper およびその他に区分けた論文、著書等の一覧表)
 - (3) 主要論文別刷(コピー可) 5編

- (4) 研究業績の概要 (A4用紙2枚以内)
 (5) 今後の研究計画及び抱負 (A4用紙2枚以内)
 (6) 応募者について意見を伺える方2名の氏名と連絡先
7. 公募締切: 平成17年1月7日(金) 必着
8. 書類提出先:
 〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所
 地震予知研究センター長 梅田 康弘 宛
 (封筒の表には「教員応募書類在中」と朱書き、郵便の場合は書留にすること)
9. 問い合わせ先:
 〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京都大学防災研究所
 地震予知研究センター長 梅田 康弘 宛
 e-mail: umeda@rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp
 (封書またはEメールに限る)

○教員公募のおしらせ

【京都大学大学院理学研究科地球物理学教室】

- 職種・人員: 京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学教室 教授・1名
- 分野: 相関地球惑星科学分野(主として、地震活動、火山活動、地下深部の変成作用等に関して、地球物質科学手法との融合を図りつつ、地球物理学の立場から研究教育を行う。)
- 応募資格および条件:
 - 博士の学位を有すること
 - 相関地球惑星科学分野に関する学部及び大学院教育を行うこと
 - 固体地球惑星科学の研究を推進し、地球惑星科学専攻地球物理学教室の運営を行っていくこと
- 勤務地: 京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学教室(京都市左京区北白川追分町)
- 着任時期: 可能な限り早い時期
- 応募書類:
 - 履歴書
 - これまでの研究経過(2000字程度)
 - 研究業績目録
 - 査読のある論文および総説
 - 査読のない論文および総説
 - 著書
 - その他の出版物で特に参考となるもの
 - 主な論文の別刷りまたは著書10編(複写可)程度
 - 特に重要な論文数編について、内容と意義を各々A4用紙1枚程度にまとめること
 - 今後の教育・研究の計画と抱負(2000字程度)
- 応募締切: 平成17年1月31日(月) 必着。教員公募

- 関係と明記し、簡易書留にて郵送すること
8. 書類の送付及び問い合わせ先:
 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
 京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
 地球物理学教室 主任 淡路敏之
 電話: 075-753-3922 FAX: 075-753-3928
 E-mail: awaji@kugi.kyoto-u.ac.jp
 地球物理学教室の概要はホームページをご覧ください。

<http://www.kugi.kyoto-u.ac.jp/>

地球物理学教室の人員構成(平成16年12月現在)

- ◎固体地球物理学講座
 測地学分野: 竹本修三教授, 福田洋一助教授, 藤森邦夫講師, 東 敏博助手
 活構造学分野: 岡田篤正教授, 堤 浩之助教授, 助手(現在空席)
 地震学分野: 教授(人事中), 中西一郎助教授, 久家慶子助教授
- ◎水圏物理学講座
 海洋物理学分野: 淡路敏之教授, 秋友和典助教授, 根田昌典・石川洋一助手
- ◎大気圏物理学講座
 気象学分野: 余田成男教授, 石岡圭一助教授, 内藤陽子助手
 物理気候学分野: 木田秀次教授, 里村雄彦助教授, 西憲敬助手
- ◎太陽惑星系電磁気学講座
 地球電磁気学分野: 町田 忍教授, 助教授(現在空席), 齊藤昭則助手
- ◎相関地球惑星科学講座: 教授(本公募)
 なお、理学研究科の附属研究施設として、地球熱学研究施設(本部: 別府, 火山研究センター: 阿蘇)と地球磁気世界資料解析センター(北白川追分町)があります。また、防災研究所(宇治)・生存圏研究所(宇治)などの研究所・研究施設と協力して、大学院の教育や研究指導を行っております。

○教員公募のおしらせ

【九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門】

- 職種・人員: 太陽惑星系物質科学講座担当教授1名
- 専門分野: 無機地球化学(岩石圏・水圏・気圏などの物質の分析により、地球惑星の環境変動や地球生物圏との相互作用を研究し、かつ教育に熱意のある方を希望)
- 着任時期: 平成17年7月以降(決定後なるべく早い)

時期)

4. 提出書類:

- (1) 履歴書
- (2) これまでの研究概要 (A4用紙2枚以内)
- (3) 研究業績リスト (原著論文(査読の有無), 総説, 報告書, 著書に区分)
- (4) 主要論文の別刷3編 (研究業績リストに○印を付す)
- (5) 研究・教育に対する抱負 (A4用紙2枚以内)
- (6) 応募者について意見を聞ける方2名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係

5. 公募締切: 平成17年3月22日(火)(必着)

6. 書類送付先および問い合わせ先: 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門
太陽惑星系物質科学講座担当教授候補者選考委員会
委員長 関谷 実

Tel: 092-642-2669 (ダイヤルイン)

Fax: 092-642-2684

E-mail: sekiya@geo.kyushu-u.ac.jp

7. その他:

- ① 提出書類のうち, (4) 以外は全て A4 用紙を使用すること.
- ② 封筒に「応募書類在中」と朱書き, 簡易書留で郵送のこと.
- ③ 選考の最終段階において講演をお願いし, 面接を行います.

○日仏自然災害ワークショップ「GeoHazards 2004」開催のお知らせ

このたび, 日仏両国にとって社会的にも関心の高い地震, 火山, 地滑り, 洪水, 干ばつなどの自然災害軽減に関して, 従来の枠を越えてのワークショップを静岡で開催することとなりました. 各分野の第一線研究者が一堂に会するユニーク

な企画となっておりますので, 多数の皆様にご参加いただきたくご案内申し上げます.

なおワークショップは英語で行われますが, 一般の方も自由に聴講できます. 最終日の3日には一般向け講演も予定されており, 地震防災対策強化地域判定会長の溝上 恵先生の講演も予定されております. 詳しくは

<http://yochi.iord.u-tokai.ac.jp/> をご覧ください.

日時: 平成16年12月1日(水)~3日(金)

会場: 静岡グランシップ 静岡県静岡市池田79-4 (JR 東静岡駅前)

<http://www.granship.or.jp/>

主催: 東海大学海洋研究所 日仏2国間ワークショップ
GeoHazards 2004 実行委員会

共催: 在日フランス大使館, フランス国立学術研究センター (CNRS), フランス国立宇宙研究センター (CNES), フランス教育省, 東海大学海洋学部

後援: 文部科学省, 静岡県, 静岡大学, 井上科学振興財団, 静岡新聞社

問い合わせ先: 東海大学海洋研究所地震予知研究センター 〒424-8610 静岡県静岡市清水折戸3-20-1

TEL: 0543-36-2862, FAX: 0543-36-0920

Email: webmaster@iord.u-tokai.ac.jp

○地球化学研究協会主催公開講座のお知らせ

【第41回霞が関環境講座】

今回の講座は, 人類未踏の地球深部への掘削を実現するための挑戦について, 分かり易く解説して頂けることが期待されます.

続いて, 第32回三宅賞受賞者の記念講演, 懇親会などがあります. 参加頂ける方は, 電子メールでのお申し込みをお願いいたします.

と き: 2004年12月4日(土) 午後2時~7時

と ころ: 霞が関ビル33階 東海大学校友会館

Tel. 03 (3581) 0121~9

(東京都千代田区霞が関3-2-5 地下鉄銀座線虎ノ門下車)

講座題目: マントルに生命を探せー掘削船「ちきゅう」の挑戦ー

講 師: 平 朝彦 先生 (独立行政法人 海洋研究開発機構 地球深部探査センター長)

座 長: 梶原 良道 先生 (筑波大学名誉教授, 地化協常務理事)

三宅賞受賞者: 村松康行博士 (学習院大学理学部教授)

研究題目: 環境中における安定および放射性ヨウ素の地球化学的研究

司 会: 河村正一先生 (放射線医学総合研究所名誉研究員, 地化協理事)

懇親会

参加費: 1,000円 但し賛助会員は無料

申込締切: 講座開講の5日前とします.

e-mail address: t-sagi@ka5.koalernet.ne.jp

☆ 講座, 三宅賞受賞記念講演, 懇親会の何れへの参加も自由ですが, 参加者名簿・名札の作成, 総数把握のため, 予めのご連絡をお願いいたします.